

も進展があるだろうから、是非この案を実行せよとすすめている。しかし、当時は本校に名誉教授の制度は無く、そのためか勧誘は失敗に終わった。

### ⑦ 浅井忠追悼会と遺作展覧會

浅井忠は一時本校西洋画科教授となり、フランス留学より帰国した明治三十五年以降は京都高等工芸学校教授に就任し、また、関西美術院長として関西洋画界の指導にあたったが、同四十年十二月十六日に死去した。葬儀は南禅寺金地院で十九日に行われ、翌四十二年三月二十三日には同所で黙語会主催の遺作展が開かれた。本校では『東京美術学校校友会月報』編集部が同誌第六卷第五号にその肖像写真と追悼記事を掲げたほかに、同年五月十日には同じく黙語会主催の追悼会と遺作展覧會が開かれた。月報はこれを次のように報じている。

○黙語會 洋畫家故浅井忠氏を追悼し、本邦美術界に於ける功績を表彰せんが爲め、氏の友人巖谷小波、和田英作、福地復一、小山正太郎、塚本靖其他諸氏の發起にて、今回黙語會なるものを組織せられ、同氏の傳記を編纂し、遺作を蒐集して之を刊行し、紀念會を開き、紀念物を建設する事と爲し、尙五月十日追悼會を兼ね東京美術學校内にて、遺作展覧會を開きたり。

(『東京美術学校校友会月報』第六卷第八号)

○浅井忠畫伯追悼會 先般物故したる浅井忠氏の知己門弟間の組

織せる黙語會にては、五月十日午後一時東京美術學校内に於て追悼會を催したるが、塚本〔靖〕博士開會の辭を陳べ、西園寺〔公望〕首相、牧野〔伸顯〕文相、原〔敬〕内相、大鳥〔圭介〕男爵の弔辭代讀あり。次に金子〔堅太郎〕大博覽會々々長は、明治美術會々々頭として始めて浅井氏を知りて以來、互に誘掖を爲したる事を陳べ、後氏の京都に去るや、同地の美術工藝界に寄與する所多く、四十五年の大博覽會には、氏に對して期待する處多かりしに、今や其溫容に接する事を得ず、氏の知己たると門弟たるを問はず、何れも日本の繪畫會の刷新に努力するは、即ち故人在天の靈を慰むる所なり、斯くの如くして得たる製作品を大博覽會に陳列して、世界の鑑識に訴へ、歐西人よりも名聲を博せんか、故人必ず欣喜すべしと説き、次で花房〔義質〕子又一場の弔辭演説を爲せり。引續きて正木〔直彦〕美術學校長は、巴里に於て故人と相識りて以來、日本繪畫界に貢獻せる氏の功績を贊し、中澤〔岩太〕工藝學校長は、京都時代に就きて、夫々陳ぶる所あり、終りに西村新一郎氏は門下生を代表し、巖谷小波氏は發起人を代表して謝辭を陳べ、三時半散會せり。當日列席したるは金子、花房兩子爵、塚本、箕作〔元〕〔元八〕、中澤、松井〔直吉〕、和田〔維〕〔維四郎〕各博士、正木、巖谷兩氏、其他約四百餘名なり。又二時よりは別館に於て遺作品の展覧會を催し、一般の觀覽に供したるが、列品は日本畫、水彩畫、油繪、繪葉書、扇面、陶器の意匠等總べて二百餘點に上りたり。尙黙語會にては、會員を募集して三年間を期し、故人の傳記を作り、製作品を出版すべしと。

(同第六卷第九号)

なお、右記事中の出版物とは『木魚遺響』(明治四十二年。芸艸堂)、『黙語図案集』(同、同)、『黙語日本画集』(同、同)、『黙語西洋画集』(同四十三年、同)等をさす。

#### ⑧ 国華俱樂部設立

明治四十一年七月五日、正木直彦が中心となって美術界の社交機関として結成した国華倶楽部の発会式が上野の美術協会で行われた。参加者は凡そ百名で、シカゴ大学文学部教授マックリントット、杉原栄三郎、坪谷善四郎の講演や山下迂作等の狂言があった(『東京美術学校校友会月報』第七卷第一号)。同会は正木を幹事長とし、毎月の例会には講演会、作品展観、各種余興、俳句会等々を行なっただけでなく、特にはじめの頃は美術家懇親会を主催したり、美術行政に関して建議を行ない、あるいは国や東京府の諮詢に応ずるなど、積極的に活動を展開し、正木が退官した翌年の昭和八年に至って解散した。結城素明は同会について「正木先生と国華倶楽部」(『美育』第六卷第五号正木会長追悼号。昭和十五年五月)の中で次のように述べている。

處で正木先生は明治三十四年八月、久保田鼎校長の後任として東京美術学校に赴任せられた折、従前より岡倉先生とは昵懇の仲でもあったので種々學校行事につき相談もし、前記の美術院より下村觀山、寺崎廣業、小堀軀音三氏を引き抜き教授にする等格別

の交渉がありました。岡倉先生のなされた日本繪畫協会の仕事に倣はれてか、學校派と在野美術家との融和、連結を謀る事がやはり斯道の發達、發展に必要であると考へられて明治四十一年に美術界の名士、愛好者並に美術、新聞記者其他を會員とする國華俱樂部を創立し、自ら會長となつて、右手に學校、所謂官、左手に國華俱樂部、所謂野と言ふ具合にこの兩者を左右に持して美術行政を圓滑に進められて來たのであります。

扱てこの俱樂部は會費制度として毎月懇談例會を開いたもので、美校俱樂部、上野公園内精養軒、同韻松亭、又は同俱樂部で買収した下谷鶯谷の料亭伊香保樓等を會場として、會員各自が自作品、收藏品などを持參して鑑賞、懇談しあい、籤引をして交換したり、種々の餘興も出たりして誠に趣好に富み、風雅に時を過したもので盛時には二百五十名以上の集合もあつた程でありました。そして時には斯道の大家、有力者を招聘して講演會を催し、その講演速記録を編輯、本として發行する等各位の意志の疏通を計り、日本美術の全般に亘り知らず／＼にその向上發展を期せしめて今日世界に誇る日本美術工藝の基礎を植ゑつけられたのであります。

#### ⑨ 第二回文展と国画玉成会第一回展

第二回文展は明治四十一年十月十五日から十一月二十三日まで上野公園桜が丘の日本美術協会展覧館および旧東京勸業博覽會第二号館で開かれた。このときは日本画部門で旧派の正派同志會が巻き返しの挙に出た。すなわち、明治四十一年七月、第二次桂内閣が成立